ぽっぺん先生の日曜日

913.6／ぽっぺん先生の日曜日

247 pp／23cm／A 5 判

著者紹介　1945年，東京に生まれる。著書は「トンカチと花将軍」（福音館書店）「スカンク　プイプイ」（あかね書房）（以上，舟崎靖子との共著）「ガヤガヤ　ムッツリ」（あかね書房）ほか。

1973年3月20日　第1刷
1973年9月20日　第2刷

定価 900 円

著者　舟崎克彦（ふなざきよしひこ）

発行者　井上達三

発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田
小川町2-8
郵便番号101-91
TEL. 03-291-7651
振替　東京4123

印刷　明和印刷
製本　和田製本

©1973
8093-88006-4604

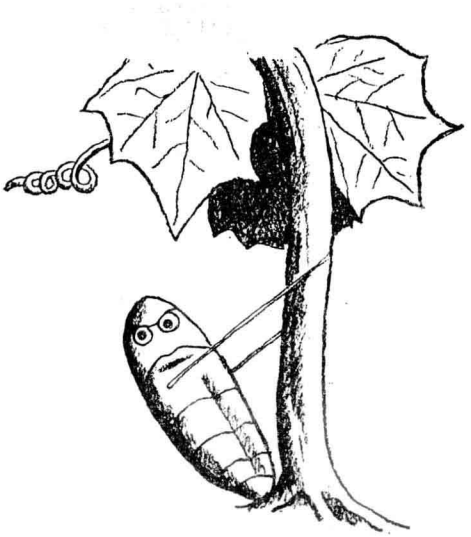
ぽっぺん先生の日曜日

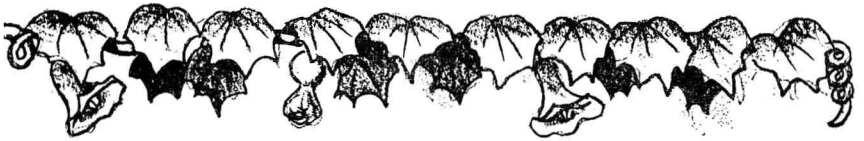
舟崎克彦

筑摩書房

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ぽっぺん先生の日曜日　もくじ



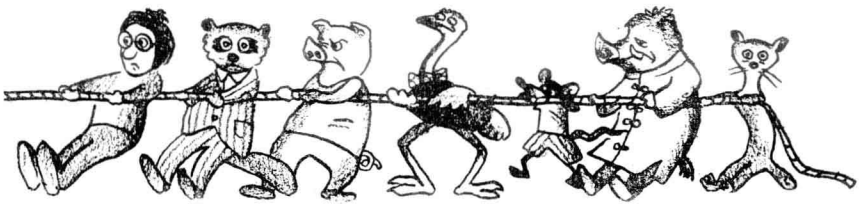


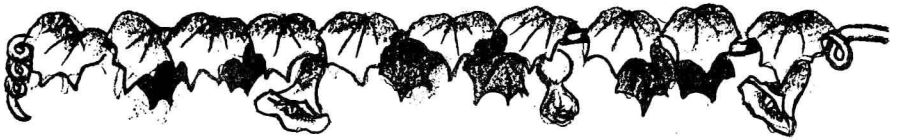
さて、そろそろはじめますか……7

ペリカンのくちばしには、なぜふくろがついているのでしょう……16

タヌキ、クロブタ、ダチョウ、トガリネズミ。この中で、はなしのおもしろいどうぶつはどれでしょう…47

カタツムリ、ミソサザイ、ワシ。この中で、にてもやいてもふかしても食べられないもの、それはいったいだれでしょう……79





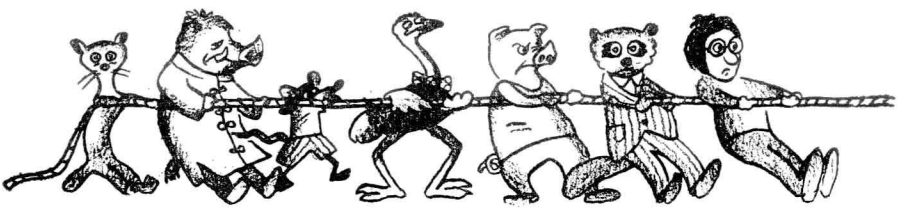
服がおふろにゆくとき、ポケットには何がはいっているでしょう……117

イノシシの赤ん坊はなぜいつまでも眠れないのでしょう……160

おもちゃかぼちゃは、ぜんぶで何種類あるでしょう……178

少年はなぜピッコロをふいているのでしょう。その答えはハモニカを持っていないからです……232

装幀・さし絵　舟崎克彦



「さて、そろそろはじめますか……」

ぽっぺん先生は、講義をはじめるときの口ぐせをつぶやくと、自分の書斎のなかを見まわしました。

ふだんでさえ、書きちらした原稿用紙や研究資料でごったがえしている先生の書斎は、つくりつけの本だなからおろした本の山で、足のふみばもありません。

「こりゃ、まるで古本屋の引っ越しだ」

先生はまあたらしいあずき色のトレーニングシャツとパンツをきて、赤茶けたコルクの床にぺったりとすわりこみ、本の整理にとりかかるところでした。

「それにしても、こいつはいったい、どこから手をつけたものだろう……」

ぬけるようにはれた日曜日の朝です。

いつもなら先生は、万年床にねころがって、ベートーベンでもききながら、本を読んだり、天井のしみをながめて、一日ぐうたらにすごすのでした。

じっさい、この三十八歳の独身の生物学の助教授が、週に一度のたいせつな日曜日をつぶして「労働」に精出すなどということは、メダカが水におぼれるよりもまれなことだったのです。たまに気がむけば、博士論文の資料をそろえに国立科学博物館の資料室をたずねたり、野鳥の会主催の探鳥会で高尾山あたりまでかけることもありました。でも、そんなことはせいぜい月に一度あるかないかでした。

ところが、その日はちょうど、そのあるかないかの日にあたっていました。先生は四千五百年前のインゲンマメの展示を、新宿のデパートへみにいく予定にしていたのです。けれど、ひにくなことに、あけがた、いやな夢をみてしまいました。書斎の本だなが、本の重みでいっせいにくずれおち、先生はその下じきになって、アンモン貝の化石のように、ぺったんこになってしまったのです。

先生は目をさますなり、インゲンマメの予定を、まよわず本の整理にきりかえました。むりもありません。その書斎は生物学博士だった父親からうけついだもので、とめ金のゆるみかけた本だなには、おびただしい蔵書がいまにもくずれおちそうにつみあげられていたのです。そこには、父親がつかっていた皮張りのいかめしい洋書類や、先生自身の集めた専門書はもちろん、先生が子どものころ読んだマンガや図鑑、「おいしい鍋料理」といった母親の本までもがいっしょくたになっていて、本をぬきさしするたびに、ギイギイとろをこぐような音を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たててきしむのでした。

そんな音を耳にしながら、いつも仕事をしている先生の不安な気持が、たぶん、夜明けのおそろしい夢になってあらわれたのでしょう。

先生は、これをよい機会に、よぶんな本は思いきって、古本屋にひきわたし、近所の大工をよんで、がんじょうな本だなを新しくつくらせるべきだと思いました。書斎は大きくならないけれど、本はこれからもどんどんふえていくはずです。

が、じっさいのところ、修理が必要なのは、本だなばかりではありませんでした。先生のくらしている家そのものが、すでになかなかのしろものだったのです。

それは先生の祖父が明治時代にたてた洋館で、腰折れの赤屋根や、キャラのまるく刈りこんだ植えこみ、玄関さきの石だたみの車まわし、そしてれんがべいにからんでいるツタのまっかに紅葉したようすなどが、外国ふうのしゃれたふんいきをただよわせてはいましたが、じっさいはちょっと大きな台風がくれば、雨もりはする、すきま風は吹きこむというありさまでした。

からくさ模様をぬりこめた洋間の壁や天井のしっくいは、一面に古地図のようなシミが広がり、張りをなくしたゆか板はコルクを打ってはあるものの、上下の物音はつつぬけで、先生が二階の書斎ではなったオナラが、一階の応接間にひびきわたるといったあんばいです。

でも先生は、この家をたてかえたり、ひきはらったりする気はちっともありませんでした。

それどころか、この家の古ぼけたところがむしろ気にいっていたのです。

あけはなした東がわの窓からさしこんでくる朝の陽は、窓べに枝をひろげているケヤキのこずえのモザイク模様を、かびくさい本でごったがえしている床一面になげかけています。

休日の、なんとなく気のぬけた朝。そのまぶしい日だまりに身をおいていると、先生は小学生のころにあともどりしたような気分になってくるのでした。

あのころは学校がひけて帰ってくると、父親の書斎だったこの部屋によくしのびこんで、床にクレヨンでいたずらがきをして遊んだものです。

先生がそんな思いにひたっていると、床に落ちているケヤキの枝影に、どこからともなく一羽のシジュウカラの影が飛んできました。

「ツーピー。ツーピー」

そのシジュウカラは、先生が窓べに出してやるピーナッツを食べに、毎日かかさずすがたを見せるのです。先生は仕事机の足に背中をもたせかけて、山と積んである本の上の鳥影をぼんやりとながめました。じつのところ先生は、どこから手をつけたらよいかわからない書斎のありさまに、いいかげんうんざりしていたのです。

シジュウカラは、窓べのさらの上で頭とシッポをポンプのように上下させながら、ピーナッツをつついているようすでしたが、しばらくすると、またケヤキの枝に舞いもどりました。そ

して細長いシッポでこきざみにリズムをとりながら、網の目のように床に広がっている枝影を飛び移りはじめました。

先生がなにげなくその動きを目でおっていくと、鳥影はカバ色の表紙の「生物学大系」という本の上をわたり、「原色動物大図鑑」をとびこえ、「爬虫類の生態と進化」の横をすべって、わきにちらばっている雑誌や古本の上にスーッとおちました。

そうして古雑誌の上をせわしなくピョンピョンと飛び移っていくと、やがていごこちのよい枝をみつけたのでしょう、一さつのうすっぺらな古本の上におちついて、のんびりと羽根づくろいをはじめました。

ほこりまみれで白っぽくなったその本の表紙には、「なぞなぞのほん」と書いてあるのがぼんやりと読みとれます。おそらく、先生が小学校にはいるかはいらないかのころに読んでいた絵本なのでしょうが、物持ちのよい母親が捨てかねて、本だなのすみっこにそっとしまいこんでおいたものにちがいありません。なにしろ先生の母親ときたら、関東大震災のときにどこからかころがってきた石を、いまもタクアン石にして使っているという人なのです。

床の上には、「なぞなぞのほん」のほかにも、「いろはのほん」とか、「たのしいのりもの」とかいった絵本が、やはりほこりまみれになってかさなりあっていました。

ついさっき、本だなから本をおろしたときには、そんなむかしの本がいっしょにまぎれこん

でいたことなど、少しも気がつきませんでした。

「なぞなぞの本ねえ……」

先生は、自分がちいさいころどんな本を読んでいたのか興味をひかれてこしをうかすと、その絵本を手にとりました。

紙が悪いのでしょうか、それともふりつもったほこりのせいでしょうか、三十何年も前の本は四すみがすりきれてボロボロにほぐれています。

表紙には、中央に大きな円がひとつ描かれており、放射線でいくつかのコマにくぎられた円の内がわには、鳥やらカボチャやら洋服やら、とりとめのない図柄がまちまちに印刷してあります。が、かつては七色の色彩でいろどられていたはずの表紙は、時の流れにすっかりその色を洗われて、みょうに白茶けて見えました。

「ほほう。こりゃあ相当なものだ」

先生は黒いべっこう縁の、時代おくれしたまるいめがねを右手でずり上げると、ガサガサした手ざわりのボール紙の表紙をめくりました。

そこは一ページ目にはいる前の見返しのページで、アワダチ草の花の模様が、一面に印刷してあります。表紙の絵よりはいくらかましですが、その色もひどくあせていて、黄色だったはずのアワダチ草の花々は黒ずんだこはく色に変色しています。

先生はページの上にうっすらとつもっているほこりを落とそうとして、本に顔を近づけると、口をとがらせてフッと息を吹きかけました。

と、そのとき、ページのすみっこでアワダチ草の一りんがちいさくゆれました。いいえ。ゆれたような気がしただけなのかもしれません。先生はここのところ乱視の度が進みはじめているので、めがねをかけていても物がブレて見えることがあるのです。

先生はいったん、めがねをはずすと、もう一度しっかりと鼻の上にかけなおして、よくよくアワダチ草の絵をみつめました。

すると今度は、今までぼんやりとあせていた花々が、とつぜん目のさめるような山吹色をおびたかと思うと、窓の外から吹い

てきた風にこたえて、いっせいにさやさやとそよぎだしたのです。

「おっ。おっ……」

先生は声にならない声をあげると、絵本をつかんだまま思わず立ちあがりました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com